

# 「幼児期の発達課題と必要な経験」を見直す

— 《シンポジウム》での議論の補足として—

島根大学教育学部幼児教育研究室 西田 忠 男

## 1 問題の所在

近年、子どもを巡るさまざまな問題が大きく社会問題化している。たとえば、小学校における「学級崩壊」や「不登校」あるいは「小一プロブレム」などと呼ばれる諸現象がそれである。これらの諸問題の原因について、それがしばしば幼児教育への批判というかたちで語られているのは周知のとおりである。そのような批判がすべて正しいとは思えないが、十分に検討してみるべき問題をわれわれに与えていることも事実であろう。

たしかに、最近の子どもが健康に育っていないということは実感としてある。発達上の個人差という概念では説明できないような状況が子どものなかに数多く見られるのである。これは、たとえば就学時において必要とされるような基本的な技能や生活習慣を子どもが身に付けていないという形で現れている。このことは、直接に、現在の家庭での子育てや幼稚園での保育のあり方への疑問へとつながってきている。もっというなら、家庭での、とりわけ若い親たちの子育て能力の低下が指摘されているいま、それに伴って相対的にその役割と重要性を増していると考えられる幼稚園教育に向けられた疑問だといってよい。

## 2 教育課程の見直しと「発達課題」

このような疑問に答えていくためのより具体的な方法として、幼稚園における教育課程と教育内容の見直しということがあろう。すなわち、「いつ」「何を」「どのように」ということをあらためて考え直してみるということである。そして、それに加えて「なぜ」ということも同時にここで説明されることが求められている。この「いつ」「何を」「なぜ」という問題を明らかにしていく手がかりを与えるものとして「発達課題」という考え方がある。

「発達課題」について考えるとき、まずハヴィガースト (Havighurst, R.) のいうそれを取り上げてみなければならないであろう。彼は、人間のそれぞれの発達段階ごとに、社会における健康で満足のいく成長をもたらすものとしての固有の学習課題を設定している。それは、「人生の一定の時期あるいはその前後に生じる課題であり、それをうまく達成することが幸福とそれ以後の課題の達成を可能にし、他方、失敗は社会からの非難と不幸をまねき、それ以後の課題の達成を困難にする」ものである。これが彼のいう「発達課題」である。そしてこの課題の背景には、生物学的・心理学的・文化的条件があるという。すなわち、それぞれの発達課題の内容はこの三つの視点から説明される、あるいは説明されなければならないものなのである。ちなみに、幼児期および早期児童期の発達課題として、「歩行の学習」

「固形食摂取の学習」「しゃべることの学習」「排泄の統制を学ぶ」「性差および性的な慎みを学ぶ」「社会や自然の現実を述べるために概念を形成し言語を学ぶ」「読むことの用意をする」「善悪の区別を学び、良心を発達させはじめる」の8つの課題があげられている。そしてこれらの発達課題は、生物学的・心理学的・文化的視点から根拠づけられているのである。

この発達課題という概念のもつ生物学的背景には、ローレンツ (Lorenz, K.) やピアジェ (Piaget, J.) らが明らかにした「臨界期」という現象があるとハヴィガーストはいう。これは、子どもに「いつ」「何を」「なぜ」教えなければならないかの、「いつ」という問題を事実として明らかにする。また、いくつかの発達課題は身体的な成熟が前提になっているものであることも意味している。さらに、心理学的および文化的背景からは「何を」「なぜ」ということが明らかにされる。このことについては、彼が大きく影響を受けたというエリクソン (Erikson, E.H.) の示す発達課題と関係づけて考えてみよう。

エリクソンはフロイト (Freud, S.) の精神分析学に基づく発達論を発展的に引き継いで、心理社会的 (psycho-social) 発達論を構築している。彼の発達理論の大きな特徴の一つは、発達に漸成 (epigenesis) という考え方を採用していることである。これは発生学で用いられる言葉であるが、彼はこの生物学的原理を一般化して、人格もまた、その発達の方向と順序が基本的に決まっているものと考え、人間の一生を8つの発達段階に分けて説明している。

エリクソンは、それぞれの発達段階には、そこで解決しなければならない発達の課題が存在するという。この課題は社会的現実との関係において現れてくるものであり、成功的に解決された場合と解決に失敗した場合を対比させるかたちで示されている。人は、この発達課題を達成しようとする過程で、それぞれの段階に固有の「心理社会的危機 (psycho-social crisis)」に直面する。そして、これらの危機を克服して発達課題を達成したときに生まれる人格的な強い力を、彼は「virtue (美德)」と名付けた。すなわち、子どもが発達の課題を解決できれば、生きていくための充実した力 (virtue) を獲得し健全な人格の発達がなされるというわけである。大人に課せられた重要な役割は、子どもが無事に発達課題を解決してこの「virtue」を獲得できるように援助し、支えていくことなのである。

以下では、エリクソンのいう人間発達の最初の段階のいくつかを簡単にたどってみることによって、その時々大人の果たすべき役割とは何なのかについて考えてみたい。

まず、乳児期に子ども (赤ん坊) が直面する心理社会的危機は「信頼感」と「不信感」の葛藤である。この段階ではおもに母子間の相互作用を通して、子どもが心のなかに「信頼感」を育てていくことが発達の課題となる。この課題の達成によって、子どもはこれからの成長に不可欠な、人生に対する「希望」という力を獲得しなければならないのである。

生まれて2～3年の頃、すなわち幼児前期の発達課題は「自律感」の獲得である。この時期の子どもは自立心という外へ向かう力と統制という外からの力との間の葛藤を通して、自分で選択し行動しようとする「意志」力を得ることが求められる。この段階では、基本的な生活習慣を中心とした「しつけ」のあり方が子どもの発達において重要な意味をもつ。なぜ

なら、これが統制という一方の力の中心になるものだからである。ここまでは、家庭とりわけ親が子どもの成長・発達に大きな影響を与える段階といえる。

多くの子どもたちが幼稚園に通っている幼児後期の段階になると、子どもは心身の発達に伴う諸能力の獲得を背景にして自分自身の存在というものをはっきりと意識できるようになる。また、いろいろなものに興味関心を示し、遊びという仮構の世界に身を置くことによって「自発性」を身に付けていくのがこの時期である。しかし、さまざまな衝動的ともいえるような行動は同時に挫折感や「罪悪感」を子どもに抱かせ、子どもを遊びへと導く積極性や探求心を失わせてしまうことにもなる。この時期の大人（親や教師）の重要な役割は、子どもを優しく包み込むことによって罪の意識を払拭してやり、子どもが自分にとって価値あるものを見つけ追及していくような勇気、すなわち「目的意識」を与えることなのである。

子どもが小学校に通う段階になると、子どもは、物事に対する好奇心と、学びたい、知りたいという強い欲求をもち、さまざまな知識や技術を習得する。そして、このような技術的な能力や自信が学校などでの集団生活の基盤になる。したがって、この段階での発達の課題が「勤勉性 (industry)」ということになる。大人がそれぞれの子どもの適した課題を与え、十分な指導を行うなら、この課題は達成される。反対に、大人の不適切な指導によって子どもが自分の知識や技能に自信を失うことになれば、それは「劣等感」につながっていく。この段階において子どもは、危機を克服し劣等感に苛まれることなく勤勉性を発揮させる力である「コンピテンス」を得ることによって、次の発達課題へと立ち向かうことができるようになるのである。

### 3 「発達の課題」をどうとらえるべきか

ハヴィガーストとエリクソンの発達課題に共通していることは、人間の生物生理学条件を一つの根拠としながらも、人間発達における社会・文化環境との間の相互作用のあり方を重要視していることである。すなわち、「発達の課題」を見直すという作業を行うにあたっては、子どもの心身の発達の理解だけではなく、子どもを取り巻くさまざまな社会的現実についての正しい理解と認識が不可欠なのである。さらには、子どもと社会の現実を踏まえた上での明確な発達観と望ましい子ども像や人間像がここには存在していなければならない。なぜなら、教育とはあくまでも未来への営みであり、「価値」を実現していく営みにほかならないからである。その価値づけを行うのものの一つが「発達課題」という概念なのである。このような発達諸課題を一人ひとりの教師あるいは園全体としての教師集団がどのようにとらえ理解するかが子どもの発達の方向やその過程を強く枠づけていくことになる。それゆえに、教師は発達の課題の意味とその価値を常に問い直しつつ保育に携わる責任があるといわなければならない。

発達の課題の意味が正確に理解できてはじめて、子どもにとっての必要な経験の内容、すなわち教師の指導と環境構成の具体的な方法を明らかにできる。結論的にいうならば、「子

どもがそうしていること」「子どもがそうしたいと思っていること」こそがその子にとって必要な発達課題であると帰納的に解釈してしまうなら、それはいわゆる「自然主義的誤謬 (the naturalistic fallacy)」に陥ってしまうことになるのである。

#### 参考文献

- (1) エリクソン、仁科弥生訳『幼児期と社会 I』みすず書房、1977年。
- (2) 小口忠彦編『人間の発達過程』明治図書、1983年。
- (3) 日本道徳性心理学会編著『道徳性心理学』北大路書房、1992年。
- (4) ハヴィガースト、児玉憲典・飯塚裕子訳『ハヴィガーストの発達課題と教育』川島書店、1992年